

増田治子著

文学の影

ジッドと漱石



増田治子著

文学の影

ジッドと漱石

駿河台出版社

著者略歴

1964年 慶應義塾大学大学院修士課程卒業

1969年 東京都立大学大学院博士課程終了

現 在 明星大学教授

主要著書 『私とは何か』——現代フランス文学への一照射

主要訳書 『キリスト教図像学』（共訳）

『イスラエル』（クセジュ文庫）

文学の影——ジッドと漱石

増田治子著

平成四年八月五日 初版印刷
平成四年八月一〇日 初版発行

定価 二八〇〇円
(本体 二七一八円)

発行所 株式会社

駿河台出版社

発行人 井田洋二

東京都千代田区神田駿河台三丁目七番地
電話(三九二)一六七六(代)振替東京九一五六六六九

印刷 佃欧友社印刷
製本 関山製本社

ISBN 4-411-02057-2 C3095 P2800E

目次

はじめに 1

第一章 青年期——気質—— 5

A ジッド——ワルテルの不安『アンドレ・ワルテルの手記』—— 7

魂と肉体のジレンマ 9

不安と狂気 13

不決断 19

B 漱石——虚空の感覚『漢詩』—— 23

寂と夢魂 26

俗と白雲郷 29

無限の間 33

狂愚 36

第二章 芸術論——詩人について——

43

A 『ナルシス論』 44

B ワーズワース、ホイットマン、老子 49

第三章 作家的基盤——ある決算——

57

A 『地上の糧』の成立 57

複雑さ 58

生の充足 63

他者の発見 72

性向の自覚 77

B 『文学論』の成立 84

I 『英文学形式論』 84

II 『文学論』 89

情緒 90

観念の連想 91

作中人物と読者 93

重圓の構造 95

天才と狂気 98

III 『英詩、英文』 101

浮遊する私 101

悲しみと夢 106

憎悪、復讐、女神 112

第四章 『吾輩は猫である』とジッド …………… 123

鏡としての「猫」 124

ジッドにおける「中心紋」 128

球体の内部——鉢合せの反響 131

「ソチ」——ずれの物語 136

『猫』にあらわれた思想とジッド 138

第五章 作品構成 …………… 149

A 漱石——鏡から複眼へ—— 149

『幻影の盾』『薙露行』 149

『坑夫』 153

『三四郎』から『彼岸過迄』前後 157

B ジッド 161

複眼的手法 161

無動機的行為 164

第六章 作中人物

漱石の人物 167

代助とジッド 173

第七章 小説技法 — 最後の小説 —

『贗金づくりの日記』 183

漱石の文学観 192

『道草』 201

『明暗』 204

『贗金づくり』 207

おわりに

はじめに

ジッドと漱石。長年に亘ってフランス文学の研究に従事して来た私にとって、これは予想しなかった結びつきである。なぜ、ジッドと漱石なのか。

それは近年、初めて漱石の若い頃の手紙や、英国留学後の講演を読む機会に恵まれたことから端を発している。あまりにも似ている、ジッドに。それが強烈なパンチになった。では何が似ているのか？ まず何よりも、人間、すなわち作家としての「資質」である、という他はない。漱石の、子規に宛てた手紙の一節から、ジッドの若い日の日記の一節が浮び上る。ジッドは、自分はこういう人間であり、従って自分の創作のキイはこういう所にある、といったことを、倦むことなく言い続けたが、それと同質の人生観なり、創作観が、漱石の講演の中にあらわれる。そうして、両者を同じ資質の作家、と断じるといふよりは、そういう印象が動かし難く自分の中で固まってしまえば、両者の作品構成、作品内容の類似性が浮び上るのに、もうほんの一步でしかない――。

果して、こうした私自身の印象は、間違っていないのだろうか。つまりこれは、私の単なる一人よがりすぎないのではないだろうか。幾分の懸念が心をかすめないわけではないのに、両者の作家としての同質性への確信は、一そうふくれ上って行く。

従って、本書は、私の中でどうしようもなくふくれ上ったこの確信——ほとんど直観的な——を、実証すべく書き下されるものである。

ジッドと漱石の作家としての同質性は、まずその作品の同質性として捉えられねばならない。しかしながら「作品の同質性」とは一体何なのか。個々の作家による作品が、内容、形式とも、それぞれの時代、それぞれの国民性の一種の制約を免れえないということが真であったとしても、だからといって、そこに「同質」が成立するわけではない。従って、ここでいう「同質性」は、単に、作家としての、作品に対する「姿勢」の同一性といった意味合いである。

そこでまず第一に取り上げておきたいのは、ジッド、漱石にひとしく見られる「自己探求の欲求の、作品への投影」ということである。自己探求は、しかしながら、およそ作家たるものの逃れ得ない道であるとすれば、自己それ自身が、一つの作品の構造としてあらわれてくるような、そういった意味での自己探求であり、自己発現である*。そしてその前に、それが「探求」である以上、すでに「捉え難いもの」、「不可解なもの」としての自己に対する苦悩が必要になるまい。

ここで試みようとするのは、ほぼ同時代を生きたとはいえ——漱石の方がはるかに早く没したが——、何らかの接触をもつことの全くなかったこの両者の、人間としての、文学者としての、資質の類似性である。ちなみに、明治元年をはさんで、漱石はその前年、ジッドはその翌年の生まれである。両者とも、神経症的、鬱病的発作に悩まされていた。両者とも、時代に迎合しなかった、というよりも、時代よりはるかに、おのれ自身に信をおいていた。その青年期に、深い混乱があった。両者とも、徹底した相対的世界を生き抜いた。両者とも、葛藤する自己の内部を作品として形成した。こう記せば、これらのすべては、ほとんどの作家に該当する事柄でもあらう。だが、文明に開花した

ばかりの後進国日本において、漱石が何に對して苦しみ、いかに自己を形成して行ったかということ、西欧文明の中心地パリに生まれたジッドが、何に苦悩し、いかに自己形成を行ったかということが、いわば共通の因子で結ばれるものならば、そこにおのずと、文学的創造というものの作用の、一つの大きな影が浮び上るのではないか。

両者とも、日本、フランスにおける、一頭地を抜く大作家であることは疑う余地がない。その勝れた資質の共通項は何であったのか。共通項の存在そのものについては、疑いをさしはさむ余地のない確信はあるものの、それを実際につきとめて行くのは、これからの仕事である。願わくば、緻密な比較対照により、空疎ならざる論の展開によって、大きな「文学の影」に突き当たりたいものだと考えている。

* たとえば瀬沼茂樹『夏目漱石——東京大学出版会——には、《どこまでも自己のうちから人間の苦悩をつかみ出し、追求してうむことを知らなかった漱石の文学と思想》という記述があり、また土居健郎『漱石の心的世界——角川選書——には、《ともかく「吾輩は猫である」の中にすでに「すべての人間の研究というものは自己を研究するものである。天地と云い山川と云い日月と云うも、皆自己の異名に過ぎぬ。自己を描いて他に研究すべき事項は誰人にも見出し得ぬ訳だ」という言葉が見られる。かくしてこのような人間研究即自己研究という態度はその後の彼の創作態度を決定的に特徴づけるものとなったのである》と記されている。

第一章 青年期

——氣質——

ジッドと漱石の相関性という点で、まず思い浮ぶのは、両者の精神的特質、氣質的特異性であろう。ジッドのばはいは、ジャン・ドレによる、幼年期から青年期にかけての精神分析的考察、すなわちジッド自身の日記、書簡、作品および周辺の人々の証言をもとにした、老大、且詳細をきわめた神経症的考察（『アンドレ・ジッドの青春』一九五六）があり、漱石に対しては、千谷七郎、土居健郎その他の、病跡と作品の相関関係を論じたものが見出される。

だが、たとえば、宮城音弥の『天才』——岩波新書——に明らかにされているように、独創的な創造能力と性格的異常性が、本来切り離すことのできないものとすれば、問題は、あくまでも、両者に共通した神経的異常性ではなく、「創作に対する両者の姿勢」、あるいは「自己考察、自己分析に対する両者の視点」にあるであろう。私がまず心打たれたのは、この点にかんする両者の視点の類似性である。従って、本書の目的は、およそ関連がないと思われる両者の作品に、その視点の類似性がいかにあらわれているかを考察する点にある。しかしまた、ごく若い時期から、両者に、ある種の異常性がみられたとすれば、それはまた、創作へ向わしめる才能の、推進力となるべき氣質の重要なモメントとして、無視しえないものであるだろう。ただ、ここでは、ジッドにせよ、漱石にせよ、その異常さが、どういう精神病のカテゴリーにはいるかを論ずることが目的ではない。第一、私にはそうしたことを論ずる資格がない。

従って、異常か正常かはともかくとして、両者における「事実」を浮び上らせる必要はあるであろう。ちなみに、両者とも、社会人としての破綻者ではなかった。生前、精神病患者としての診断を下された事実はなく、そのための治療を受けねばならなかったこともない。ジッドがしばしば日記に記した不眠や気分的落ちこみが、一般人の体験とどれほど著しく隔たっているものか、疑問にも思われよう。ただ、若い時期から、誰しも通過する「自分との戦い」「自己克服」「自己確立」が、どういう方向へ向けて行われたかは重要であろう。そして、このことの前には、すでに前提として、「捉え難いもの」「不可解なもの」としての自己に対する苦悩がなければならず、そうした自己を、どういう形体において捉えたか、あるいは捉えざるを得なかったかの問題があり、その所で、先天的にか後天的にか、負わせられた性格、気質があるとすれば、自己を確立する方向は、その性格、気質に、大きく左右させられずにはないであろう。つまり、自己確立の方向は、「抽象的なあるべき方向」であるよりもはるかに重く、原初的な自己の性質、気質により構築されると考えられるからである。

本書では、出来うるかぎり忠実に、両者自身の日記、手紙、作品から、それを見極めて行きたいと考える。つまり、第三者的な見解は参考にしない、ということである。これは、本書の目的が、両者の文学者、ないしは小説家としての本質の解明にあり——たとえそれが、両者の人間自体と切り離しえないものであるにせよ——、そしてこのことは、つまりは両者の作品自体の解釈につながるものとなるからである。しかし、ここで、第三者的見解といったのは、作品解釈以外の、たとえば日常的側面のあれこれであって、ジッドにせよ、漱石にせよ、かくも夥しい研究書がすでに世に出たあとの現在では、作品解釈につながる批評を無視しえないのは言うまでもなく、また、無視するつもりはさららない。ただ、そのすべてに目を通すことは、實際上不可能であることを危懼するのみである。

A ジッド——ワルテルの不安『アンドレ・ワルテルの手記』——

《わたしはいつまでも、こんな風に苦しまねばならないのか。主よ、わたしの精神は、以後、どんな確信の中にも憩うことがないのでしょいか。(……)》

わたしは、自分がどういう人間になるのか分らなくて不安なのだ。自分がどういう人間になりたがっているのかすら、分らない。でも、選ばなければならないことは分っている。わたしは、確かな道を辿りたいのだ。その道は、わたしがあらかじめ行くことを決めた場所へ、ともかくも通じている道なのだ。しかし、わたしには分らない。分らないのだ、何を欲しているのかが。わたしは、自分の中に、夥しい可能性を感じる。だが、その中の一つだけでありたいと願って他を諦めることができないのだ。ひとつの言葉を書いたときに、ある身振りをするたびに、いつもそれが固定されて、自分の顔立ちの、消し去ることのできない余計な線になるのではないかと思われて、怖しくなるのだ。はっきりしない、個性のない顔立ち、たるんだ顔立ち——。それというのも、わたしに選ぶことができず、毅然として顔立ちを決めることができなかったからである。

主よ、どうかわたしに、ただ一つのことしか願わず、いつもそれを願いつける力をお与え下さい》

アンドレ・ジッドの若い日の日記の中で、最も強く印象づけられるのは、やはり右の一節であるように思われる。
一八九二年（明治二十五年）一月三日。ジッド二十二歳。

この一節が、青年期一般に見られる精神的な不安定性と、それに伴う自己のアイデンティティーへの希求をあら

わしていると考えても、何ら不都合はないであろう。たとえば百科事典(Grand Larousse)の「青春期」の項目を引けば、次のように記述されている。《青少年の行動は、その目的と理想の不安定性をあらわしている。それは、青少年の人格のさまざまな部分が、それぞれの速さで変化するからである。この年代に特有の極度の感受性や、感情の豊かさや、コントロールの欠除が、大人の目には気まぐれに映るほど、感情状態を、速いリズムで継起させる。青春期は、自己のアイデンティティーの追求にあり、自分への不安な問いかけがこれを示している》

にも拘わらず、青春期、といっても二十二歳に達したこの時期の、「選択不可能性」についてのこの記述は、その後のジッドの、作家ないしは人間としての動向を、決定づけるような重要性をもっていると考えられるのである。

この時期、ジッドはすでに、処女作『アンドレ・ワルテルの手記』を上梓しており、続いて『ナルシス論』、『アンドレ・ワルテルの詩』を書き上げていた。ジッドはこの処女作に、肉体の脅威に対する魂の不安、おののき、そして魂にとつての勝ち目のない闘争を塗りこめた。それは、作者自身の内面であると同時に、作者には、それこそが、すべての青少年に共通した問題であると信じられていたものである『「一粒の麦もし死なずば」』。当代のすべての若者の、思春期的な不安、動揺に、指針を与えたいとする作者の思惑はみごとに外れ、この無名の若者の著書は、一冊も売れなかった。とはいえ、彼が献呈した当代の高名な詩人、作家たち、マラルメ、メーテルリンク、ユイスマン、アンリ・ド・レニエ、といった人々からは、賛辞を受けるという十分な結果を得ている。そしてまた、それらの人々から才能を認められたことが、マラルメの火曜会や、エレディアの土曜会のメンバーとして名を連ね、パリの文学者サークルに出入りするきっかけを作ることになるばかりか、オスカー・ワイルドと親交を結ぶ機会にも恵まれることになるのである。

ところで、その処女作『ワルテル』から二年後の、前出の日記に見られる精神状態は、一体何であるのか。ジャ

ン・ドレは、この一節をさほど重要視しているようには見えない。彼によれば、一八九一年十一月、十二月と、ワイルドに魅了され、その影響を受けたジッドが、自分の中に生まれつつある、まだ無名の新しい人間と、彼本来のワルテル的、ユグノー的古い人間とのはざまに落ちこんだものとして説明している。ドレの説は間違っていないであろう。しかし、ここで重視したいのは、はざまに落ちこんだという事実ではなく、ジッドにおける「選択不可能性」「不決断性」である。右の日記の一節は、特定の時期における、右せんか、左せんかの、二者択一的選択の苦悩をあらわしているというよりも、ジッド自身の体質的、性格的悩みとしての不決断性を物語っているように思われる。従って、それを考察する手がかりとして、やはり、ジッド自身の思春期の総決算ともいえるべき『ワルテル』に立ち戻る必要があるであろう。

魂と肉体のジレンマ

『アンドレ・ワルテル』は、ジッドが二十歳の夏、執筆された。『一粒の麦もし死なずば』の中で語っているとこのによると、ジッドは、一八八七年（十七歳）頃から、『心の中のはっきりしない動揺に形を与える必要』から、日記をつける習慣をもつようになっており、その総決算として、『自分自身のあらゆる疑問、あらゆる内面的葛藤、あらゆる動揺、あらゆる困惑』を糧として書き上げた『ワルテル』の中に、その日記が、ほとんどそのままの形ではめこまれることになった。従って、『ワルテル』は、十六、七歳から二十歳に至るまでのジッドの精神構造をみるのに、最も適したテキストということになる。

それでは、青春の墓碑銘と呼ぶにふさわしいこの処女作は、何をあらわしているのだろうか。

まず、終始一貫して流れている基調が、「魂」にあることは明らかである。まず、魂への呼びかけ、『お待ち、お

まえの悲しみがいま少し休まるのを、——かわいそうな魂よ、昨日の戦いが、何とおまえを疲れさせたことだろう』で始まる『ワルテル』は、『魂をもてりと信じたるが故に、発狂したアランここに眠る』という、ワルテルの分身であるアランの死と、それに引き続く、ワルテル自身の死でしめくられる。

では魂とは何なのか。

魂は肉体に対置され、また精神に対置される。肉体は魂をおおい隠すものである。精神はうつろい、魂はとどまるものである。ワルテルが『アラン』を書くために記したとされるノートには、魂と肉体は、天使と獣、敵対する二人の俳優になぞらえられ、魂は上昇するもの、肉体は錘として定義される。

《二人の俳優、天使と野獣。敵対者——魂と肉体。マテリアリスムというものはありえない。イデアリスムと同様に。あるのはただ両者の戦いのみ。(……)ただ単に一人の人物、だれでもよい任意の人。あるいはむしろ、彼の頭脳。それは、ドラマが展開される共通の場所にすぎない。敵対者が攻め合う閉された戦場。この敵対者は、対立する二つの情熱ですらなくて、ただ単に、二つの本質、つまり、魂と肉体。そして、かれらの戦いは、ただ一つの情熱、ただ一つの欲望から生じる。つまり、「天使として振舞うこと」》

ここで興味を引かれるのは、人間を、魂と肉体という二項であらわしていることではなく、両者の戦いの場としていることである。そして、両者の闘争は、ただ一つの情熱、すなわち「天使として振舞うこと」に起因する。人間そのものを戦場とみたとき、その戦いの起動力たる情熱は、一体どこから来るのか？ それこそ、『アラン』という作品を書くこととしてゐるワルテル・ジッドの企みであり、この企みには、従姉マドレーヌへの求婚という意図が絡んで